

した跡も存する。

定信筆大字切については現存する断簡の数が限られており、本文系統の推定は困難である。しかし、卷子本・安宅切とともに後人の加筆とされている和歌(62の次に位置する)を共有する等、定信筆大字切もその一系に属すると思われる。

【系統図】において点線で囲った伝本群は書写史的にも共通性を有している。書の家である世尊寺家、あるいはその周辺の人々の手になると思われる。

如上のように書写年代が十二世紀と推定されている諸伝本はいずれも粘葉本・雲紙本兩類の要素を有する。また、既述した通り、十二世紀の書写とされる諸伝本特有と思しき要素をも共有しており、それらを一群として捉えた場合、卷子本・葦手本等は「再稿本」ではなく、同時代の諸伝本が相互に接触、混合した結果、生成された伝本の中の一本であると考ええる。

時代の流れとともに雲紙本・粘葉本兩類の本文が混じたことは確かであると思われる。しかし、その事象は十一世紀中葉の書写とされる伝行成筆大字切に既に確認される。また、後代のかと思われた要素が同作品に存しており、それらが古い時代に遡り得る可能性について、堀部正二氏のご指摘の通り、注目されるところである。ただし、同作品は僅かな分量しか現存しておらず、全体像は掴み得ない。

本書(第二章)中、指摘した通り、後代、粘葉本・伊予切の類は普及しなかった。後代の諸伝本の形態・本文は多岐に亘る様相を呈する。十二世紀の書写とされる諸伝本のうち、とりわけ久松切・戊辰切等が後代へ与えた影響は大きいと推測され、両本は流布本の根源を辿る上でとりわけ貴重な資料であると考えられる。その実態の調査については今後の課題である。

本書中、図版の多くは二玄社刊『日本名跡叢刊』・『日本名筆選』から引用させて頂いたものである。末文乍ら、同出版社には掲載のお許しを頂き、御礼申し上げます。

## 既発表論文一覧

本書中、収めた既発表の論文は以下の通りである。収めるにあたり筆削を加えた。本書における所在は各項目末尾の括弧内に示す。

- 「文字分析による『和漢朗詠集』雲紙本と関戸本との関係」（『語文』第113輯 平成14年6月 日大国文学会）【第一章第一節】
- 「『和漢朗詠集』雲紙本と関戸本の関係」（『日本語と辞書』第2輯 平成9年5月 古辞書研究会）【第一章第二節】
- 「雲紙本和漢朗詠集にみられる別筆」（『語文』第107輯 平成12年6月 日大国文学会）【第一章第三節】
- 「伊予切和漢朗詠集の書に関する一考察」（『語文』第121輯 平成17年3月 日大国文学会）【第二章第一節】
- 「『和漢朗詠集』伊予切〈第一種〉の書―粘葉本との関係―」（『語文』第149輯 平成26年6月 日大国文学会）【第二章第二節】
- 「『和漢朗詠集』伊予切〈第一種〉と粘葉本の書に関する一考察」（『お茶の水女子大学人文科学研究』第12巻 平成28年3月）【第二章第三節】
- 「近衛本『和漢朗詠集』の性格―粘葉本系統との関係を中心に―」（『書学書道史研究』第24号 平成26年10月 書学書道史学会）【第二章第四節】
- 「『和漢朗詠集』伊予切の性格―粘葉本との関係を中心に―」（『語文』第153輯 平成27年12月 日大国文学会）【第二章第五節】
- 「安宅切『和漢朗詠集』の位置」（『語文』第117輯 平成15年12月 日大国文学会）【第三章第一節】
- 「卷子本『和漢朗詠集』の位置」（『語文』第122輯 平成17年6月 日大国文学会）【第三章第二節】
- 「葦手本『和漢朗詠集』の位置」（『中古文学』第61号 平成10年5月 中古文学会）【第三章第三節】
- 「十二世紀書写とされる『和漢朗詠集』諸伝本について―葦手本を中心として―」（『書学書道史研究』第16号 平成18年9月 書学書道史学会）【第三章第三節】

- 「戊辰切『和漢朗詠集』の位置」〔『語文』第114輯 平成14年12月 日大国文学会〕【第三章 第四節】
- 「『和漢朗詠集』葦手本と戊辰切巻上の書に関する考察」〔『語文』第138輯 平成22年12月 日大国文学会〕【第三章 第五節】
- 「山城切『和漢朗詠集』の本文」〔『語文』第102輯 平成10年12月 日大国文学会〕【第三章 第六節】
- 「久松切『和漢朗詠集』の位置」〔『語文』第119輯 平成16年6月 日大国文学会〕【第三章 第七節】

## あとがき

本研究に着手してから二十年以上が経過した。遅遅たる歩みの中、今もなお未完であり、不十分なところも多い。次なる課題へ向けて本研究を進めるためにも御批評を頂きたく思い、この度、既発表の拙稿を補訂し、新たに書き起こしたものを加えて公表させて頂くこととした。これまで多くの先生方に御教示頂いたが、浅田徹先生、阿部好臣先生、石原太流先生、梶川信行先生、杉谷寿郎先生のお名前は（誠に勝手ながら五十音順とさせて頂き）ここに記させて頂きたいと思う。心から敬意と感謝の意を表します。

本書を成すにあたり、御尽力頂きました森いづみ・餌取直子両氏（お茶の水女子大学附属図書館）にも末文乍ら厚く御礼申し上げます。

本研究の一部はJSPS学術研究助成基金助成金「PI5K02214」の援助を受けたものである（『和漢朗詠集』諸本の集成と研究・基盤研究（C））。

平成二十九年（二〇一七）八月

山本まり子

## 平安時代書写 和漢朗詠集 諸伝本の研究

2017年8月26日 発行

---

著 者 山本 まり子

発 行 お茶の水女子大学附属図書館 (E-book サービス)

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

<http://www.lib.ocha.ac.jp/>

電話 03-5978-5835 FAX 03-5978-5849

**I S B N 9 7 8 - 4 - 9 0 4 7 9 3 - 2 3 - 7 C 3 0 9 2**

本著作の著作権は著者が保持しています。著作権法上の著作権の制限を超える利用については、お茶の水女子大学附属図書館にお問い合わせください。